

# 『冬のソナタ』受容における 世代間好感度ギャップ\*

河野 貴美

## 1. はじめに

2003年に初めて日本で放映された韓国ドラマ『冬のソナタ』は、異例のヒットとなり、「ヨン様」こと主演のペ・ヨンジュンと『冬のソナタ』の人気は社会現象となった。また、『冬のソナタ』がきっかけとなって、韓国文化全般を指す「韓流」という言葉もすっかり定着した。「韓流」は、その年の世相を表す言葉が選ばれるユーキャン流行語大賞で、2004年に大賞を受賞している<sup>1)</sup>。テレビ情報誌には、いまや「韓国ドラマ」というジャンル分けが存在することが当たり前になっているし、レンタルショップで韓国ドラマのコーナーが急増したのにも『冬のソナタ』が一役買っていると言ってよいだろう。

しかし、『冬のソナタ』が語られる際には、メディアを賑わした熱狂的なファンが揶揄され、特に中年女性<sup>2)</sup>のファンがヨン様を追いかけて、時間とお金をつぎこむ姿が批判されることが多い。ある程度、メディア側の操作だろうが（『冬のソナタ』には若い女性ファンもいたが、そうしたファンの姿がテレビに映されることは少なかった）、中年女性がこのドラマのファン層の中心であることは事実といえよう。

この調査では、マスメディアの研究を行なっている有馬ゼミナールにおいて共同で行なったアンケート調査の結果をもとに、『冬のソナタ』受容における世代間好感度ギャップを明らかにしたい。それによって、なぜ日本の中年女性の多くはこのテレビ番組に熱中したのに対し、若年女性のほとんどは醒めていたのかという問いに答えたい。

---

\* 社会科学総合学術院有馬哲夫教授の指導の下に作成された。

## 2. ドラマ『冬のソナタ』の概要

### (1) 制作スタッフと反響

まず簡単に、ドラマ『冬のソナタ』について述べておきたいと思う。

2人の女性脚本家キム・ウニとユン・ウンギョン、監督ユン・ソクホを中心に制作されたこの作品は、韓国KBSで2002年に放映され、翌2003年6月にNHK衛星第二で夜10時の海外ドラマ枠で放映された。番組は徐々に口コミを通して広がり、番組終了時にはNHKに多数の問い合わせがあったという。これを受けて、同年末よりBSで再放送、さらには地上波で再々放送された。地上波放送での視聴率は、深夜帯にもかかわらず、最終回では20.6パーセントという驚異的な数字を記録した。(林 2005 9頁)

登場人物名	演じた俳優
チョン・ユジン	チュ・ジウ
カン・ジュンサン イ・ミニョン	ペ・ヨンジュン
キム・サンヒョク	パク・ヨンハ
オ・チェリン	パク・ソルミ

### (2) ドラマのあらすじ

ドラマのあらすじであるが、母と妹と3人で暮らす明るい主人公・チョン・ユジンは、幼馴染のキム・サンヒョクとまるで兄弟のような関係で、家族ぐるみの付き合いをしてきた。ある日、2人が通う高校にカン・ジュンサン（\*発音の都合上、名前のみ場合はチュンサンとする）が転校生としてやってきた。彼は、勉強もスポーツもでき、優等生のサンヒョクとライバル関係になる。チュンサンは、どこか憂いのある青年であるが、ユジンとチュンサンは次第に惹かれあっていく。しかし、交通事故によって突然、チュンサンはユジンの前から姿を消してしまう。

10年後、建築デザイナーとして活躍するユジンは、サンヒョクと婚約し幸せで充実した日々を送っていた。しかし、初恋の人・チュンサンにそっくりの風貌をもつイ・ミニョンが現れたところから新しい展開が始まる。彼は、取引先の若き取締役であり、チュンサンとは正反対の明るい人物。だが、2人の風貌がそっくりなため、ユジンの心はサンヒョクとミニョンの間で揺れ動く。また、ミニョンもユジンのひたむきさや芯の強さに惹かれていくことになるのだが、その中で高校時代の同級生であり、ミニョンの恋人チェリンに嫌がらせを受けたり、サンヒョクへの裏切りに悩んだりする。

そんな中、ミニョンは交通事故で記憶をなくしたチュンサンであったことが判明し、2人は愛を誓い合うのだが、2人が兄弟かもしれないという出生の秘密が明るみになり、2

人は別離を決意する。しかしこの時すでに、チュンサンは失明を宣告されていた……というストーリーである。

二人の男性がヒロインを奪いあう、典型的な三角関係のストーリーであり、つぎつぎと悲劇が巻き起こるメロドラマ的作品であるといえよう。

### 3. アンケート調査の概要

つぎに、今回行なったアンケート調査について述べる。まず、対象を20代女性と40～50代女性の2つのグループに分け、選択式と自由回答式が入り混じった同じ質問を電話でしたときに特に違いが見られた質問に対する回答の違いに注目した。主な質問内容は次のようなものである。また、今回のアンケートでは20代の方14名、40～50代の方19名に協力していただいた。以下が質問である。

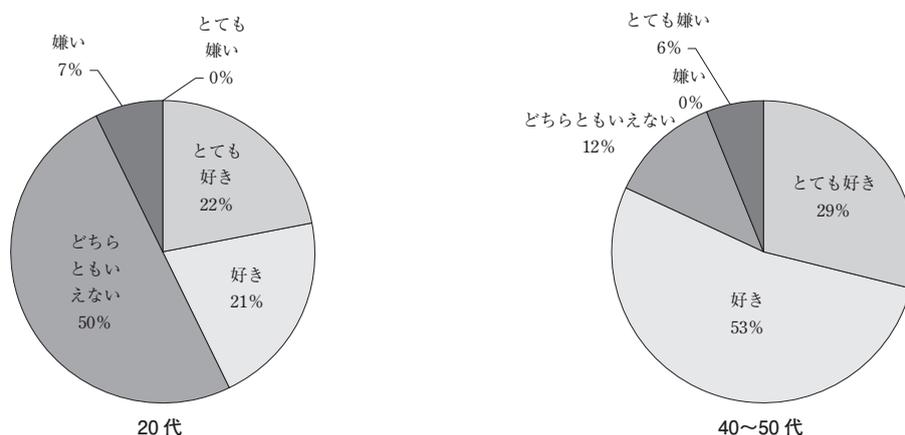
- ①『冬のソナタ』は好きですか？  
a とても好き b 好き c どちらともいえない d 嫌い e とても嫌い
- ②『冬のソナタ』をどの形態で観ましたか？  
a テレビドラマ b レンタルDVD c 自分でDVDを購入 d インターネット
- ③『冬のソナタ』の登場人物のなかで、誰に一番共感しましたか？  
a ユジン b チュンサン c サンヒョク d チェリン e その他
- ④登場人物が好きですか？その理由はなんですか？【ユジン チュンサン サンヒョク チェリン についてそれぞれ質問】  
a とても好き b 好き c どちらともいえない d 嫌い e とても嫌い  
理由：a 性格 b 外見 c ファッション d 雰囲気
- ⑤『冬のソナタ』のどこが魅力的だと思いますか？（複数回答可）  
a ストーリー b キャラクター c 出演者 d 音楽 e その他
- ⑥『冬のソナタ』を観て懐かしいと感じましたか？  
a はい どのシーンで b いいえ
- ⑦日本のテレビドラマで、どのジャンルが好きですか？  
a 恋愛ドラマ b ホームドラマ c サスペンス d その他
- ⑧ドラマの中で日本と共通している、または異なっていると思う部分は何ですか？
- ⑨運命の人はいると思いますか？  
a いると思う b いないと思う c わからない

#### 4. アンケートの結果と分析

まず、目に付くのはジェネレーション・ギャップである。『冬のソナタ』が好きかどうか、という質問に対して「とても好き」と「好き」と答えた人の合計が、20代では43パーセントだったのに比べて、40～50代では82パーセントと非常に高かった。

こうした結果は、予想通りであった。サンプル確保の段階で、40・50代では「『冬のソナタ』を観たことがある」という女性を探すのは容易だったが、20代ではそのような女性を探すのに苦勞した。このことから中年の方が『冬のソナタ』に興味をもち、能動的に『冬のソナタ』に触れようとする傾向があり、好意的に捉えているということが考えられる。

①『冬のソナタ』は好きですか？

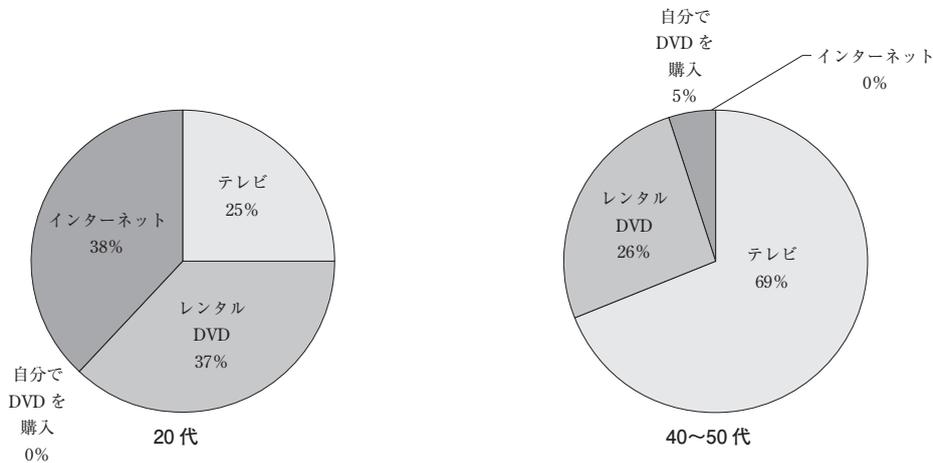


第二に世代間で大きく差が生じた部分は、「このドラマをどのような形態で視聴したか」という質問への回答である。中年層ではテレビでの視聴が69パーセントと最も多く、インターネットによる視聴者が0人だったのに対し、20代ではインターネットによる視聴が38パーセントで、レンタルDVDと並んで最も多い視聴形態だった。

このことの原因として考えられるのは、やはりメディア接触の違いと生活スタイルの違いだろう。テレビでこのドラマを見る、ということは、放映時間にテレビの前にいなければならない。しかし若者は、テレビの他にも娯楽の種類がたくさんあり、コンテンツに自分を合わせる傾向は少ない。そこで、自分の好きなタイミングで見ることができるインターネットやDVDという形での視聴が中心になるのであろう。また、一般的に若者のほうがインターネットの扱いに慣れていることも大きな要因といえよう。

だがしかし、こうした違いはなぜ中年が『冬のソナタ』を好み、若者にはそれほどイン

## ② 『冬のソナタ』 をどの形態で観ましたか？（複数回答可）



バクトを与えなかったかということも直接説明できない。ここで注目すべきは、各登場人物に対する好感度の違いである。

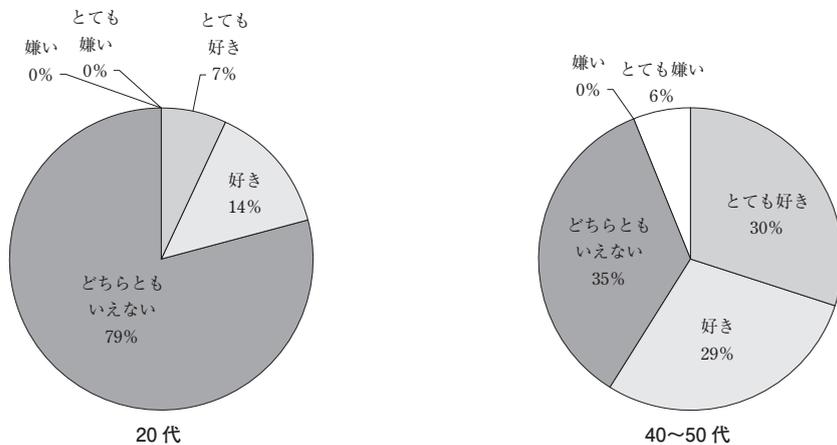
最も大きな違いはヒロイン・ユジンに対しての好感度である。20代の回答によると、彼女たちはヒロインと同じくらいの年齢にもかかわらず「どちらともいえない」が79パーセントで最も多く、「とても好き」「好き」の合計は21パーセントである。しかし、40～50代の回答では、「とても好き」「好き」の合計は59パーセントと過半数を超えている。

ユジンのどこが好きか、という項目について見てみても20代で「どちらともいえない」と答えた人は、その理由を「性格」とし、「優柔不断だから」「はっきりしない性格だから」とのコメントがいくつか見られたが、40～50代のコメントでは「一途」「まじめ」「辛抱づよい」「意思の強さがある」「外見が綺麗」というキーワードが見られた。この違いはどこから生まれてくるのであろうか。

この原因を、私は「自分が結婚を目指して恋愛をしているか、それともその時期が済んでいる（と一般的に考えられている）かどうか」に注目して分析してみたいと思う。20代の女性は、ユジンと年齢が近く、これからいわば恋愛のゴールともいえる「結婚」を目指す身である人がほとんどである。そういった人々はユジンの優柔不断な態度にイライラし、ヒロインの上手く進まない恋愛を嫌う傾向にあるのではないかと、というのが私の考えである。一方で、40～50代女性は、ほとんどがすでに結婚を経験し、「恋愛最前線」からは一歩退いた人々である、とすることもできる。ゆえに、彼女たちはユジンの恋模様は「フィクション」として純粋にとらえ、恋愛の終結までを見守る立場になるのではないだろうか。その立場からすると、悩むユジンの姿はとてかわいらしく、いとおしく見える。それがこの好感度の差に表れていると考えられる。

## ④以下の登場人物が好きですか？その理由は何ですか？

## i) ユジン



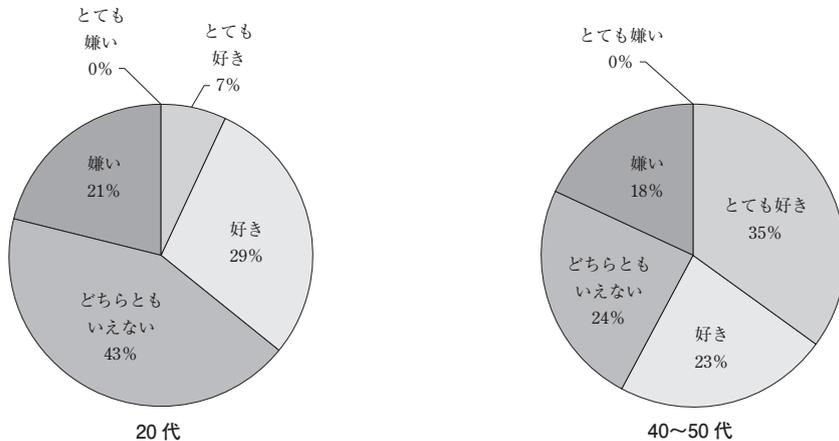
このことについては、林香里も『『冬ソナ』にハマった私たち』の中で次のように指摘している。まず、女性は「結婚して新しい家族の中に入り、子どもを育てていくとき、ほとんどの女性は新しい環境の中で否応なしに娘時代に持っていた価値観や人生観を改めなくてはなくなる」そして、「夫の前でも自ら進んで『女』をあきらめることを社会全体が奨励してきた」。そうした条件の中年女性にとって『冬のソナタ』での愛の描かれ方（自分たちの未体験ゾーンであるストレートな愛情表現等）は、「『中年』女性の『女』という性が、家族という社会制度内の役割だけに特化して組み立てられてしまっていることを、期せずして韓国のドラマ『冬のソナタ』が炙り出している。女性たちは純愛ストーリーを通して、『女』という社会的役割と『女性』であることの大きなズレを自分の人生のなかであらためて発見し、それを観察せざるを得ない立場に立つことになったのだった。」（林 2005 41～45頁）

林はこのことを踏まえうえて「自己投入願望」が中年女性を『冬のソナタ』ファンたらしめている、としている。だが私は、中年女性は自分も同じ経験をしたかった、と考えているよりもむしろ、この作品を一時の心の慰めとして見る「夢物語」としてとらえているのではないかと思う。

女性が結婚したとたんに「女」の性をあきらめ、夫や子供に愛を与える立場になる、という変化は紛れもない事実であると思うが、その現実を「当たり前」ととらえ、受け入れていることもまた事実だ。彼女たちにとって『冬のソナタ』は「現実味がないが、理想的なセリフやストーリー展開が繰り返し広げられているのを見ているうちに、元気づけられる作品」というスタンスの方がより近いのではないだろうか。

同様のことが、他のキャラクターの好感度についても言える。特に差が大きく開いたの

## ④ ii) チュンサン



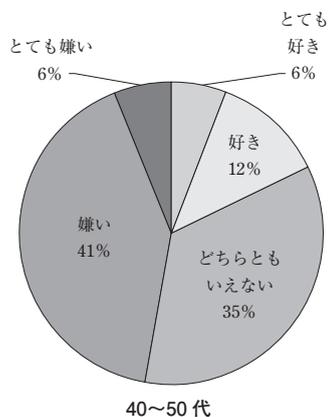
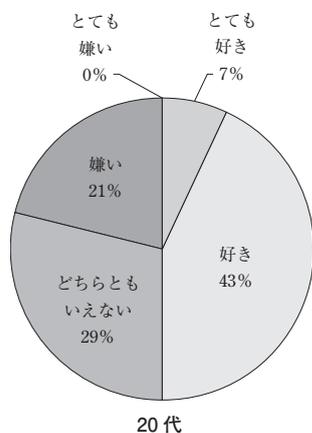
は、もう1人の主人公である「チュンサン」への好感度である。20代の回答では、「とても好き」「好き」があわせて36パーセントだったのに対し、40～50代の回答ではこの二つをあわせると58パーセントになった。

チュンサンとそれを演じた俳優、ペ・ヨンジュンの人気に関する指摘は数々あり、「チュンサンには男性性よりも女性性に近い「耐え忍ぶ」姿勢の役回りであり、女性の経験を包摂する立場の人である」（林 2005 115頁）や「『ヨン様』という表象は『ノスタルジア』への力学、『理想形』としての男性のイメージの想像＝創造、そして『現実的ないまここ』という三つ巴の輪的干渉によって常に書き換えられて」いる（李 2004 107頁）などと述べられているが、今回のアンケート調査では特にペ・ヨンジュン人気の根本的な要因までは追求できなかった。

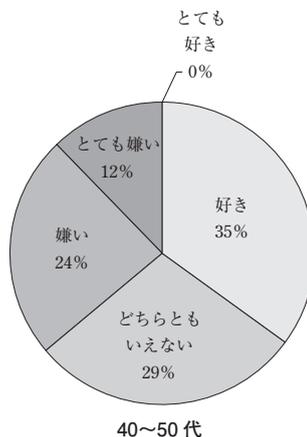
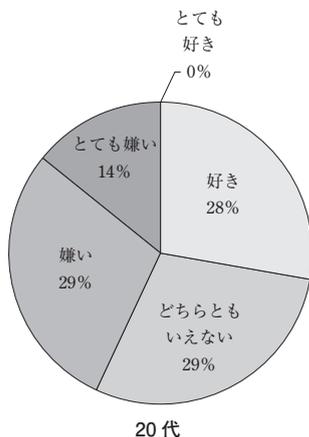
しかし、やはりここで年代間の好感度に差が出たのにも、ユジンに対する好感度と同様の理由であると考えられる。というのも、この2人の好感度は相関関係があり、ユジンの好感度が高い人はチュンサンの好感度も高いという結果が得られたからである。

さらに、もう一つ考えられる理由として、メディアでの過剰報道が生んだ歪みの可能性についても指摘しておきたい。昨今は「ヨン様フィーバー」についての報道も沈静化したものの、ブームの真っ只中では我を忘れて「ヨン様」を追っかける“オバサン”ファンの姿が連日、ワイドショーで報道され、週刊誌に取り上げられていた。そうした光景を目にしていた20代女性は「ああいうファンと一緒にやりたくはない」という思いが潜在的に働いていたのではないかと推測される。私自身、この研究を行なう前には「韓流」に特別な興味もなく、かといっていわゆる「嫌韓」の立場の人間であったわけでもないが、「ヨン様フィーバー」の印象は鮮明に残っており、むしろそのことで「韓流」を遠ざけていた面もあったからだ。

## ④ iii) サンヒョク



## ④ iv) チェリン

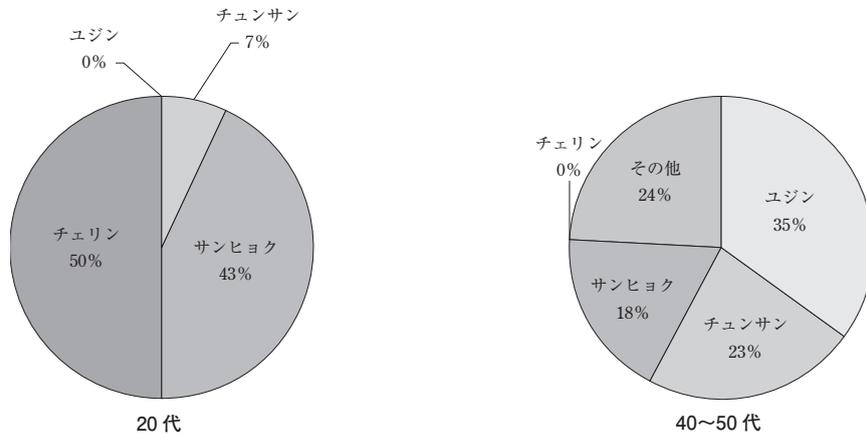


もう一つ、サンヒョクに対する好感度についても見てみると、今度は反対に20代の好感度が高いことがわかる。「とても好き」「好き」を合わせると50パーセントになる。しかし、40～50代では、サンヒョクを「とても好き」「好き」と答えた人はわずか18パーセントで、「嫌い」「とても嫌い」と答えた人は47パーセントになった。

確かに、サンヒョクは所謂「恋敵」の役どころであるため、ユジン・チュンサンに肩入れをする視聴者にとって、サンヒョクは邪魔な存在である。アンケートでも「女々しい」「しつこい」の記述が非常に多かった。この40～50代の反応は、至極もったもんな反応であるといえよう。しかし、20代にとってのサンヒョクは「一途」「ユジンのことを一番に思っている」「誠実」といった点が好感を持たれているということがわかった。

このことと、もう1人の恋敵役であるチェリンの好感度を合わせて考えてみたい。彼女は、チュンサンを手に入れるために嘘をついたり、ユジンを罠にはめたりする。そのた

## ③ 『冬のソナタ』 の登場人物のなかで、誰に一番共感しましたか？



め、どちらの年代からもほぼ同じ割合の好感度で、「嫌い」と「とても嫌い」が目立つ結果になったが、一方で興味深いことに「登場人物の中で誰に一番共感したか」という質問に対して、20代の50パーセントが「チェリン」と答えているのである。マイナスの感情を持っているにも拘らず、彼女に共感している。それはつまり、チェリンの気持ち（チュンサンが好きということストレートにぶつけて、何とかして自分に振り向いてもらいたい）は理解することができるが、それを果たそうとするやり方は理解できない、実行の移し方に問題があると感じていると読むことができるのではないだろうか。

この二つのケースから見えてくるのは、「恋愛がうまくいかない状況にリアリティを感じ、2人の異性の中で揺れる姿よりも、たとえうまくいかなくても1人の異性への思いを貫き通す姿に共感する」という20代女性の価値観である。いまや、「婚活」という言葉が広く認知され、結婚するのに努力しなければならないと言われる世の中である。その中で、恋愛の理想と現実の差を肌で感じている20代女性の姿が見てとれる。

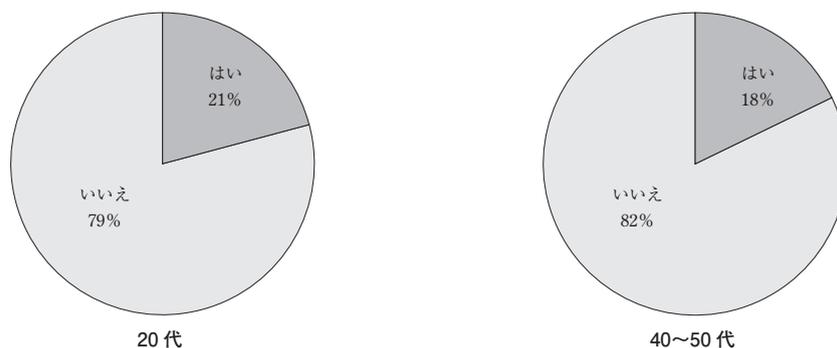
また、『冬のソナタ』を語る上でしばしば持ち出されるのが「中年層がこのドラマから、古きよき日本を思い出し、懐かしさを感じているのだ」という視点である。しかし、今回のアンケート結果では『冬のソナタ』を観て懐かしいと感じたかどうかという質問に対して40～50代で「はい」と回答したのは、わずか18パーセントであった。このアンケート調査を行なう前には、ノスタルジーを感じていることがこのドラマが中年に受けた最大の理由ではないかと考えていたので、この結果は意外であった。

調べてみると、『冬のソナタ』の脚本を書いたのは、2人の若い女性であり、この2人と監督がこのドラマで目指したのは「すべての人が純粋な気持ちで穏やかにみられるドラマ」「初恋の初々しさと美しさを人々が感じて、しばし過ぎ去った思い出をたぐりよせながら、日常の中で疲れた心をひとときでもいやすことができる」<sup>3)</sup>こととのちに語ってお

り、日本で販売されたDVD映像やインターネットの書き込みを調べたところ、韓国ではこのドラマのヒットを支えていた主な視聴者層は、若い世代であったことがわかった。

アンケートの意見のなかにもいくつか指摘があったのだが、「家族を大切にしている」「目上の人を立てる」という意見は、『冬のソナタ』ファンがよく語ることである。こうした韓国の儒教精神について特に中年層に支持されていることに関して、クォン・ヨンソクは「日本という国の韓国に対する優位性」が中年女性にこれまでにないほどの韓流ブームをもたらした背景にある、として「日本人は、しばしばアジアに『古き良き日本』を見ようとする。(中略) そのノスタルジックなまなざしの中に、日本人という他者(強者)が想定する『あるべき理念』が含まれている場合がないだろうか。」「親孝行で目上の人に礼儀正しい、韓国の儒教倫理に対する称賛には、じつは日本人の自己肯定という趣がないだろうか」(クォン 2010 49～52頁)と述べている。

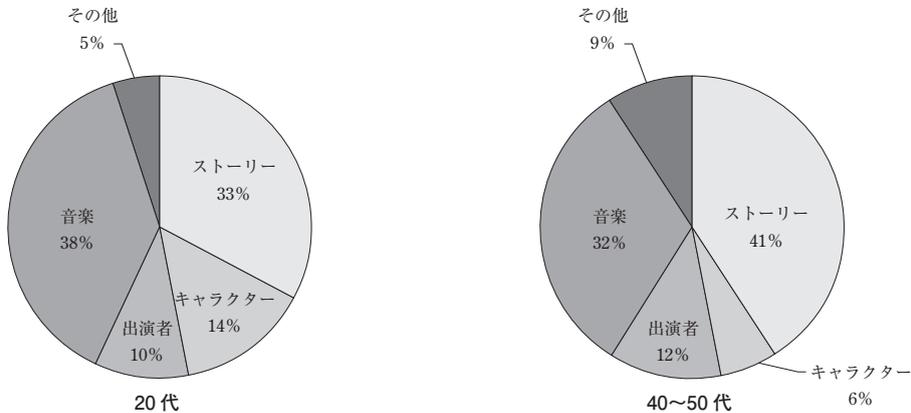
⑥『冬のソナタ』を観て懐かしいと感じましたか？



しかし、今回の調査をしてみて明らかになったことは、中年女性が感じる『冬のソナタ』の魅力は、ただ単に韓国に昔の日本を重ね合わせて懐かしんでいる、というのではなくドラマそのものが持つ魅力とこれまでになかった韓国ドラマの流入によっていい意味で韓国のイメージが裏切られたことにあるのではないか、ということだ。

岩淵は、「日本のメディア記事やコメントでは『『冬のソナタ』にはまる中年女性』を揶揄しながら、韓国ドラマは古い、昔の日本のドラマみたいだという見方がなされ、韓国社会が遅れているという認識が見え隠れしている。しかし、実際に魅了されている人々は(中略)メディアで表象されているものを少し前の日本の在り様と直接的に重ね合わせてはいない。投射されたノスタルジアの対象は失われた純愛であるが、それは現実の社会で失われたものであるというよりは、いまの自分を鼓舞するようなドラマの語りである。つまり、それは失われたものについての語りではなく、語りそのものの喪失に向けられている。」(岩淵 2004 120～121頁)と指摘している。今回のこのアンケートを見ても、

## ⑤ 『冬のソナタ』 のどこが最も魅力的だと思いますか？（複数回答可）



『冬のソナタ』のどこが魅力的だと思うかという質問に対してどちらの世代も「ストーリー」と「音楽」が魅力的だと答え、この質問に対する回答結果は二つの世代間で非常に似たものになった。

一般的に、韓国ドラマの魅力として挙げられるのは俳優の演技のレベルが高いことである。韓国の芸能界の競争は熾烈で、演技の実力第一主義だといわれている。第二には、シナリオを含めた物語性の高さも挙げられる。韓国ドラマでは、人物を深く、細かく、丁寧に描こうとする。主人公だけでなく、周辺人物もきちんと描くのである。これには、韓国の市場はもともと小さく、コンテンツを「海外」に輸出して利益を出す必要があることから、必然的に質の向上が求められる、という背景がある。さらに、製作費も多くかけられる、ドラマの尺が決まっていないため、無理な編集をしない、CMをはさまない、放送回数も長い、等々恵まれた制作環境にあると考えられる。

個人的にいくつかの韓国ドラマを視聴してみて、「はまる」「のめりこむ」という感覚が非常にあった。次回が楽しみでわくわくした。この背景には、制作面での好条件もあるのだろうが、なにより感じたのは過剰な感情表現に対する抵抗感が徐々に薄れていくことだ。

『冬のソナタ』もそうだが、韓国ドラマでは日本人が決して口にしないようなセリフが頻繁に登場する。はじめはこうしたセリフに違和感を覚えるのだが、「これは韓国ドラマであるのだから、こうしたセリフもあるのだ」と次第に納得でき、日常の（自分の）生活にはないようなストレートな感情表現が楽しみになってくる。私はここに「フィクション」としてのドラマの魅力を感じた。

話を『冬のソナタ』に戻すが、林は「韓国は日本にとって距離的にはもっとも近い隣国であるにも関わらず、植民地支配という歴史的禍根に由来する克服し難い心理的隔りがある」という背景を示したうえで、『冬のソナタ』が日本でヒットしたことによって、こ

れまで関心を持たなかった（もつ機会が奪われていた）「韓国」の近代化された様子やドラマで描かれた美しい純白の雪景色、（とそれにシンボライズされた正直さ、清潔さ、礼節、純情や純潔という価値）によって真っ赤なキムチを食べ、ニンニク臭くて、大声で話す、という日本での韓国に対するステレオタイプのイメージが覆された、と指摘している。

また、林は『冬のソナタ』を支える中年層は日本のマスメディアに対して批判的で、「見たいものがない」と嘆いている、ともしている。これは、中年女性は魅力的な広告ターゲット（いわゆる F2・3）ではない→広告収入がない→中年向けの番組ではなく若者向けの番組が制作されるという構図に起因している。そうした中、NHKが扱った『冬のソナタ』は、ある種教養番組としての側面にも触れられている。

これらのいくつかの要因が重なり合わさって、『冬のソナタ』が爆発的な人気を得たのだろう。ゆえに、繰り返すことになるが特に中年視聴者がこのドラマを支持した理由は、韓国ドラマが数年前の日本のドラマに似ている、あるいは彼女たちの青春時代を思い起こさせる、出演俳優やドラマに映し出される様子が古き良き日本に似ているため、懐かしさからこのドラマが受けたのだ、という判断は一面的であるといえよう。

## 5. まとめ

以上のことから、世代間ギャップについてまとめると、若年女性の恋愛をめぐる現状よりも中年女性の置かれている結婚後の環境の方が、このドラマの「様々な障害を乗り越えていく愛の物語」にマッチしていることが最大の原因だということができる。近年の若い女性は、選択肢が増えていくと言われる。結婚を選択せず、自分1人を養い「おひとりさま」を満喫する女性も増えている。しかし、幸せな結婚生活や、運命的な出会いにも憧れる、というのが若い女性の本音なのではないだろうか。

だが、『冬のソナタ』の世界はあまりにゴールが明確すぎ、また、あまりに純真すぎると感じられるのかもしれない。『冬のソナタ』の2人は、運命に翻弄されているといえなくもない。それよりも、「自分でこれからの人生を切り開く」物語を求めているのではないだろうか。

### 註

- 1) 「『冬のソナタ』今年のユーキャン流行語大賞トップ10入り」(2010年2月15日アクセス) 自由国民社ホームページ <http://www.wowkorea.jp/news/enter/2004/1202/10000573.html>
- 2) 本論では40～50代の女性、広告業界でいうF2・3を「中年」とする。
- 3) 『もうひとつの冬のソナタ チュンサンとユジンのそれから』キム・ウニ、ユン・ウンギョン ワニブックス 2004年

## 引用・参考文献

- 林香里「『冬ソナ』にハマった私たち 純愛、涙、マスコミ……そして韓国」文春新書 2005年
- クォン・ヨンソク「『韓流』と『日流』 文化から読み解く日韓新時代」NHK出版 2010年
- 李智旻「新聞に見る『ヨン様』浸透現象—呼称の定着と『オバファン』という存在」『日式韓流「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房 2004年
- 岩淵功一「韓流が『在日韓国人』と出会ったとき—トランスナショナル・メディア交通とローカル多文化政治の交錯」『日式韓流「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房 2004年
- マツヤマジュンコ「The ペ・ヨンジュン論 女たちは、なぜこんなにも彼を愛したのか。」英治出版 2005年
- 山田昌弘・白河桃子「『婚活』時代」ディスカヴァー携書 2008年